二〇一九年度

北海道公立高校入試問題

四五分
六〇点

（注）問いのうち、字数が指示されているものについては、句読点や符号も字数に含めて答えなさい。

一

次の問いに答えなさい。

問一　(1)～(4)の――線部の読みを書きなさい。

(1) 弱点を克服した。

(2) これまでのやり方を踏襲する。

(3) 専ら聞き役に徹する。

(4) 船が水面を滑らかに進む。

問二　(1)～(4)の――線部を漢字で書きなさい。

(1) 時計のたんしんが文字盤の10を指す。

(2) 百分の一のしゅくしゃくで模型を作る。

(1)	(2)	(3)	(4)
		ら	らか

(1)	(2)

(3) 新しい国語辞典を弟にかした。

[　　　]した

(4) 強敵にいさましく立ち向かう。

[　　　]ましく

問三　次は、中学生の西島さんが、図書館の職員にインタビューを行うため、館長の春田さんに電話で依頼したときの会話の一部です。これを読んで、(1)、(2)に答えなさい。

(春田さん)　はい、私が春田です。
(西島さん)　はじめまして。お忙しいところすみません。私は、○○中学校の西島と申します。今、少しだけお時間を1もらえますか。
(春田さん)　ええ、大丈夫ですよ。どのようなご用件ですか。
(西島さん)　ありがとうございます。実は、学校の授業で、仕事について調べることになり、私は図書館の仕事を調べたいと考えています。そこで、館長さんや職員の皆さんに、放課後、直接インタビューしたいと思っています。
(春田さん)　分かりました。希望の日はありますか。
(西島さん)　2急ではありますが、[　　]。
(春田さん)　いいですよ。では、午後四時に来てください。

(1) ——線1「もらえますか」を、謙譲語を使って敬意を高める表現に書きかえなさい。

[　　　　]

(2) ——線2が、翌日に訪問する許可を求める文となるように、[　　]に当てはまる表現を、十字以上、二十字以内で書きなさい。

[　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　]

問四　次の文は、一生懸命なのが「私たち」の場合と、「選手」の場合の、二つの異なる解釈ができます。一生懸命なのが「選手」だけであると解釈できる文とするために、読点を一か所打つとき、どの文節の後に打つのが最も適当ですか、その文節を書きなさい。

私たちは一生懸命にボールを追う選手に声援を送った。

問五　次の文章を読んで、(1)、(2)に答えなさい。

植物は、どうして種子を遠くへ運ばなければならないのだろうか。種子を移動させる理由の一つは分布を広げるためである。

それでは、どうして分布を広げなければならないのだろうか。親の植物が種子をつけるまで生育したということは、少なくとも生存できない場所ではないだろう。わざわざ別の場所に種子が移動しても、その場所で無事に生育できる可能性は小さい。そんな一か八か(ばち)のために種子をたくさん作って散布するよりも、1子孫たちも、その場所で幸せに暮らした方が良いのではないだろうか。

植物は、大いなる野望や冒険心を抱いて種子を旅立たせるわけではない。

環境は常に変化をする。植物の生える場所に安住の地はない。常に新たな場所を求め続けなければならないのだ。そして、分布を広げることを怠った植物は、おそらくは滅び、分布を広げようとした植物だけが、生き残ってきたのである。それが、植物たちが種子散布をする理由である。

2常に挑戦し続けなければいけないということなのだ。

（稲垣栄洋「雑草はなぜそこに生えているのか」より）

(1) ――線1「子孫たちも……良いのではないだろうか」とありますが、「その場所」とはどのような場所ですか。解答欄に示した表現につながるように、文中から十五字で書き抜きなさい。

□□□□□□□□□□□□□□□することができた場所

(2) ――線2「常に挑戦し続けなければいけない」とありますが、「挑戦」が表している内容を次のようにまとめるとき、［①］、②に当てはまる表現を、それぞれ文中から五字以上、七字以内で書き抜きなさい。

植物が、新たな場所を求めて［①］させることで、［②］とすること。

① □□□□□□□

② □□□□□□□

二

次の問いに答えなさい。

問一　(1)、(2)の文は、――線部と～～線部との言葉の関係が不適切です。この文の内容を変えないように、～～線部を適切に書き直しなさい。

(1) 私の夢は、多くの人を感動させられるようなピアニストになりたい。

(2) たとえ遠く離れた土地で暮らしたなら、故郷のことは決して忘れない。

問二　(1)、(2)の文から、誤って使われている漢字一字をそれぞれ書き抜き、同じ読みの正しい漢字を書きなさい。

(1) 国際連合では、二〇五五年には世界人口が百憶人を突破すると予測している。

誤って使われている漢字　正しい漢字

(2) 町内会の総会で審議された予算案が、反対多数で非決された。

誤って使われている漢字　正しい漢字

問三　次の文章は、X町に住む中学生の本田さんが、校内放送で町の魅力を話した内容の一部です。これを読んで、(1)、(2)に答えなさい。

1　X町は、小さい町ですが、若者で活気のあるところが魅力だと思います。
2　私は、小学生のときから毎年、秋の収穫祭や、仮装フェスティバルなどに参加しているのですが、最近は、これらの行事に同じ学校の生徒や近所の先輩など、若者がたくさん参加するようになり、活気が増してきたと思います。さらに、私の周りには、大人になってもずっとX町に住みたいと言っている友人も多くいて、若者が減っていく心配はないと思います。
3　X町には、他にも魅力がたくさんあるはずです。皆さんも、X町の新たな魅力を探してみませんか。

(1)　本田さんが話した内容について説明したものとして最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア　自分の考えを正確に伝えるため、聞き手に繰り返し呼びかけている。
イ　自分の意見を述べた上で、対立する意見も取り上げている。
ウ　自分の意見を述べるだけでなく、そのように考えた理由を示している。
エ　自分の感想を述べないようにして、客観的な内容にしている。

□

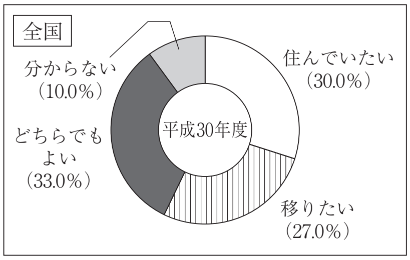
(2)　2の段落を、あなたが次の調査結果をもとに話すとき、条件1、2にしたがって話す内容を書きなさい。

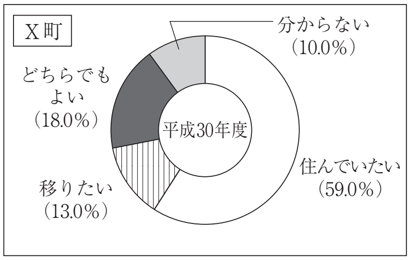
条件1　X町の調査及び国の調査から読み取ったことを、それぞれ書くこと。

条件2　条件1で書いた二つのことを踏まえて、X町の今後について考えられることを書くこと。

【国の調査】

あなたは将来も今の地域（市町村）に住んでいたいと思いますか。

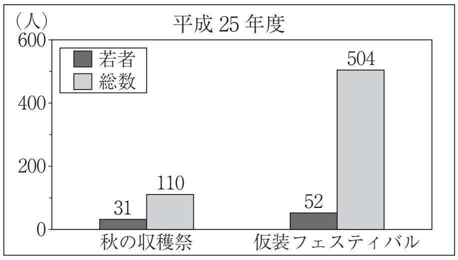


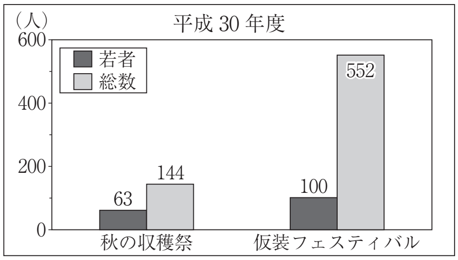


・この調査は，全国の13歳から29歳の若者を対象に行ったものである。

【X町の調査】

あなたが今年度参加した，X町の行事は何ですか。





・この調査は，X町の町民を対象に行ったものである。
・この調査では，13歳から29歳を「若者」としている。

三

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

> これは、写真の同好会である「チーム３００」に所属する「ぼく（礼央（れお））」が、同じ同好会に所属する耳の聞こえにくい「美駒（みこま）ちゃん」と、活動場所の「イチマルサン」を出て歩いているときの話です。

ふたりで並んで歩く。四月末のいま、日が少しずつ長くなってきていて、太陽はまだ斜め上の高いところにある。日差しは温かいけれど道の角を曲がるたびにひんやりとした風に包まれた。温かい日差しと冷たい風。このない混ぜな感じが春だな、なんて思う。

「あのね、訊（き）きたいことがあって礼央君を誘ったんだよね」

隣を歩く美駒ちゃんが見上げてきた。

「な、に？」

ぼくは唇を大きく動かして返事をする。

「批評会のときにヒロ君となにか話していたでしょう。あれはなにを話していたのかなと思って。ホワイトボードに書いてくれなかったからわからなかったんだよね」

「ああ、あれね」

ぼくは思い出したというふうに両手を打ち合わせるゼスチャーをし、ジーンズの尻ポケットからスマートフォンを取り出した。ディスプレイにタッチペンで書きつけて見せる。

〈写真は自分ではない外の世界を撮っていながら、結局は自分を写しているんだなって話〉

1 <u>読み終えた美駒ちゃんがなぜか頼もしげにぼくを見て微笑（ほほえ）んだ。</u>

「いいと思うな」

なにが「いいと思うな」なのだろう。ぼくは首を傾（かし）げた。

「礼央君のそういう感じ方はわたしに近い気がする」

「ほ、ん、と、に?」

「うん。さすがいままで表現の分野に携わってきただけあるよ」

駅に着き、二階の改札口に続くエスカレーターのふもとで別れた。美駒ちゃんはゆらゆらと手を振ってエスカレーターに乗って帰っていった。

イチマルサンに戻るぼくの足取りは軽かった。ややもするとスキップしてしまいそうになった。美駒ちゃんから褒められたのがうれしくてしかたなかったからだ。

「わたしに近い気がする」

美駒ちゃんはそう言っていた。ぼくは彼女に近づけた。新たな扉を開いたような心地がした。

写真を始めたばかりのぼくにとって、美駒ちゃんがくれた微笑みは道しるべだ。写真の世界で何歩も、いや、何百歩も前を行く彼女に認められた喜びがある。それでいいよ、と背中を押してもらえた心強さがある。また、ヒロがいまだ気づけていない写真の境地に先にたどり着けた優越感もあった。

ふわふわとした心地で帰り道を歩く。公園に植えられたユキヤナギの白がまぶしい。時期が終わって地面にまき散らされた八重桜の花びらがやけにいとおしい。ゆっくりと薄らいでいく空の青が目にやさしくて好きだ。

道の角を曲がった。その途端、ひんやりとした風に全身を包まれた。ぼくはその冷たさの中で足を止めた。胸の内側にまで冷気が忍び込んでくる。浮かれていた心がいっきに冷やされた。

ぼくはうな垂れてアスファルトを見つめた。汚れたスニーカーの爪先が目に入る。

「浮かれている場合じゃないだろ」

自分に向かって言い放った。ぎゅっと両方のこぶしを握りしめる。

写真家として認められ始めている美駒ちゃんに褒められれば、そりゃあうれしい。ぼくだけでなくチーム３００のメンバーは誰もが美駒ちゃんに褒められたがっている。ぼくもこの三か月間はシャッターを切る瞬間に、彼女から褒められる自分を想像した。

でも、そんなことでは駄目だ。ちょっと褒められたぐらいで有頂天になってどうする。ぼくは美駒ちゃんを越えていきたい。ぼくはヒロみたいに美駒ちゃんの信奉者になるつもりなどない。彼女に勝ちたいのだ。

中央線が高架の上を走っていく。美駒ちゃんが乗った列車かもしれない。彼女は電車に乗っていても写真を撮る。車窓を流れる景色を撮ってくる。車内でスナップを撮ってくる。

今日も帰りの車内でシャッターを切っているはずだ。灰色の東京の街を貫いて走るあの車両の中で。

「負けたくないな」

写真を撮りたい欲求が急速に膨れ上がってきた。なぜイチマルサンからカメラを持って出てこなかったのか。手ぶらで出てきた自分に腹が立つ。ぼくはイチマルサンに向かって駆け出した。2のんびり歩いてなんかいられない気分だった。

もっと撮ろう。上達してみせよう。美駒ちゃんはぼくと同じ二十五歳でありながら、あれだけの撮影技術を身につけ、すでに個展を開き、写真集の話も進んでいる。彼女と同じスピードで進んでいたら追いつけない。勝てやしない。

ぼくは走らなくてはいけない。全速力で走って、3今日開いたような新たな扉をいくつも開けて進んでいかなくてはいけない。美駒ちゃんはきっとその先にいる。

（関口　尚「サニー・シックスティーン・ルール」より）

（注）ヒロ君――チーム300のメンバーの一人。
スナップ――ここでは、人物などを手早く撮った写真のこと。

問一　――線1「読み終えた……微笑んだ」とありますが、「ぼく」は、美駒ちゃんの微笑みが、「ぼく」にどのような気持ちをもたらしてくれたととらえていますか。文中から三つ、それぞれ三字以内で書き抜きなさい。

問二　――線2「のんびり歩いてなんかいられない気分だった」とありますが、「ぼく」がこのような気分になったのは、美駒ちゃんに対するどのような思いによって、このとき何をしたくなったからですか、三十五字程度で書きなさい。

問三　――線3「今日開いたような新たな扉」とありますが、「ぼく」がこの日、新たな扉を開いたと感じたのは、美駒ちゃんとのやりとりを通して、どのようなことが分かり、どのように思えたからですか、四十字程度で書きなさい。

問四　次は、この文章における表現上の工夫の一つをまとめたものです。①、②に当てはまる表現を、それぞれ文中から書き抜きなさい。ただし、①は七字、②は八字とします。

「ぼく」が［①］ときに感じていた［②］が、春の季節感を表すためだけでなく、「ぼく」の心情の変化のきっかけとしても用いられている。

①

②

四　次の文章を読んで、問いに答えなさい。

岸玄知は、雲州侯の茶道なり。和歌を好めるの癖あり。或日（あるひ）、郊外へア出（い）でて、梅圃（ばいほ）の花盛りにて、梅樹の主を問ひて、樹を買はんとす。敢（あ）へてイ肯（がへん）ぜざるを、高価を以（もっ）て強（し）ひて望みければ、已（や）む事なく約す。翌日、酒魚を以て樹下に来たりウ慰む。農夫曰（いは）く、根の損せざるやうに掘りうがち、明日持ちまゐるべしとエ云（い）ふ。玄知の云ふ、いな左様に非（あら）ず。いつまでも爰（ここ）に置くべし。さあらば実、熟さば如何（いか）にすべしとオ問ふ。実は用なし、只（ただ）花のみ望む所にして、吾（わが）物にして見ざればおもしろからずとぞ。

（司馬江漢「春波楼筆記」より）

（注）雲州侯の茶道——出雲（いずも）の国（現在の島根県東部）の領主に仕え、茶会を取り仕切る者。
好めるの癖あり——こよなく愛している。
梅圃——梅の木を植えている畑。
敢へて肯ぜざる——どうしても了承しない。
慰む——楽しむ。

問一　——線「約す」について、ここでの意味と同じ意味で使われている「約」を含む熟語を、ア～エから選びなさい。

ア　要約　イ　婚約　ウ　倹約　エ　集約

□

問二　〜〜〜線ア〜オのうち、岸玄知の動作を表しているものを、二つ選びなさい。

問三　この文章の内容に合うものを、ア〜エから一つ選びなさい。

ア　農夫は、梅の木が他の人の手に渡ると、梅の実の収穫量が少なくなるので、梅の木の値段を高くして、その木を買うことを岸玄知にあきらめさせようとした。

イ　農夫は、梅の木を買った岸玄知の目的は、梅の実を手に入れることだと思っていたが、玄知は、和歌の題材となる梅の花を持ち帰りたいと思っていた。

ウ　農夫は、岸玄知が梅の畑に来たのは、食事をしながら梅の花を見るためだと思っていたが、玄知は梅の花には興味がなく梅の実が欲しいと考えていた。

エ　農夫は、梅の木を買った岸玄知のためにその木を掘って届けようとしたが、玄知は、今の場所で、ただ梅の花を自分のものとして眺めたいと考えていた。

二〇一九年度

北海道公立高校入試問題

一

解答

問一、(1) こくふく　(2) とうしゅう　(3) もっぱ(ら)　(4) なめ(らか)　問二、(1) 短針　(2) 縮尺　(3) 貸(した)　(4) 勇(ましく)

問三、(1) いただけますか　(2) 明日お伺いしてよろしいでしょうか (16字) (それぞれ同意可)　問四、私たちは

問五、(1) 親の植物が種子をつけるまで生育(することができた場所)　(2) ① 種子を移動　② 分布を広げよう

解説

問三、(1)「もらう」を謙譲語にする。(2) 明日行ってもいいですか、という内容のことを敬語表現にする。

問四、「一生懸命」が「ボールを追う選手」にかかることがわかるように、これらの文節は読点を入れずに続け、最初の「私たちは」の後に読点を入れる。

問五、(1) 種子を移動させる前に植物がいた場所を指している。(2) ここでは、分布を広げるために種子を遠くへ飛ばし、新たな場所を求め続けることを「挑戦」と表している。

二

解答

問一、(1) なることだ　(2) 暮らしても(または、暮らしたとしても)(それぞれ同意可)

問二、(誤って使われている漢字・正しい漢字の順に) (1) 憶・億　(2) 非・否

問三、(1) ウ　(2) (例) X町の調査によると、秋の収穫祭や仮装フェスティバルに参加した若者の数が、五年で約二倍に増えています。国の調査によると、将来も今の地域に住んでいたいと思うX町の若者の割合は、全国の割合の約二倍となっています。これらのことから、今後もX町は活気のある町であり続けると思います。

解説

問一、⑴「夢は」としているので、それを受ける述語は「…こと」という体言にする。⑵「たとえ」は逆接の仮定の表現にかかる。

問二、⑴「憶」は思う、覚えるという意味で、数値を表す場合は「億」を使う。⑵「非」は、「～ではない」という意味で、決定を否定する場合は「否」を使う。

問三、⑴ 1段落目で自分の意見を述べ、2段落目で、そう考えた理由を示している。⑵ X町の調査では、秋の収穫祭よりも仮装フェスティバルに参加した人が多いこと、どちらも参加人数は平成25年度よりも平成30年度の方が総数、若者の人数とも増えており、増えた人数は主として若者であることが読み取れる。また、国の調査では、X町に住んでいたいと考えている若者の割合が、全国比からみて、X町で高いことが読み取れる。

三

解答

問一、喜び・心強さ・優越感　問二、美駒ちゃんに負けたくないという思いによって、写真を撮りたくなったから。（35字）（同意可）

問三、写真に対する感じ方が美駒ちゃんに近いことが分かり、彼女に近づけたと思えたから。（39字）（同意可）

問四、①道の角を曲がる　②ひんやりとした風

解説

問一、「美駒ちゃんがくれた微笑みは道しるべだ」として、それによって、「写真の世界で何歩も…喜びがある」「それでいいよ、と…心強さがある」「ヒロがいまだ気づけていない…優越感もあった」という気持ちがもたらされたことをあげている。

問二、美駒ちゃんに「負けたくないな」と思い、「写真を撮りたい欲求が急速に膨れ上がってきた」と、その時の気持ちが表されている。

問三、「新たな扉」について、前の部分で、「そういう感じ方はわたしに近い気がする」という美駒ちゃんの言葉から、「ぼくは彼女に近づけた」と思ったことで、「新たな扉を開いたような心地がした」と表現している。

問四、最初に「ぼく」は「道の角を曲がるたび」に「温かい日差し」と「ひんやりとした風」の「ない混ぜな感じ」に春を感じている。だが、後では、その「ひんやりとした風」の冷たさが、「浮かれていた心がいっきに冷やされた」という心情の変化に使われている。

四

解答

問一、イ　問二、ア・ウ　問三、エ

解説

問一、本文では、梅の木の売買の約束をする、という意味で使われている。アは要点をまとめるという意味。ウは出費をおさえるという意味。エは整理して一つにまとめるという意味で、それぞれ、簡略にするという意味で「約」が使われている。イが結婚の約束をするという意味で「約」が使われている。

問二、イは「樹を買はんとす」のを「肯ぜざる」ということなので、梅樹の主の動作を表している。エは先に「農夫曰く」とあるので、農夫の動作を表している。オは玄知が「いな左様に非ず…置くべし」と言ったことに対して、「さあらば…すべし」と問うたということなので、玄知と話している農夫の動作を表している。

問三、農夫は「根の損せざるやうに…持ちまゐるべし」と言っているが、玄知は「実は用なし…吾物にして見ざればおもしろからず」と、梅の木をもとの場所に置いたままで眺めたいとしている。

口語訳

岸玄知は、出雲の国の領主に仕え、茶会を取り仕切る者であった。和歌をこよなく愛している。ある日、郊外に出て、梅の木を植えている畑が花盛りだったので、梅の木の主を訪ねて、（梅の）木を買おうとした。（梅の木の主は）どうしても了承しないが、高価で無理やり買うことを望んだので、（梅の木の主は）やむなく売ることを約束した。翌日、（玄知は）酒魚を持って（梅の）木の下に来て楽しんだ。農夫は「根が傷つかないように掘り起こして、明日持って参りましょう」と言う。玄知は「いやそうではない。いつまでもここに置いておこう」と言う。「それならば実が熟したらどうしましょう」と（農夫は）問う。（玄知は）「実は用はない、ただ花だけを望んでいるのであって、自分の物にして見ないのであればおもしろくない」と言ったことだ。